



IPCC 統合報告書の問題点（速報）

2014/11/07

温暖化の政策科学

杉山 大志

（一財）電力中央研究所／IPCC 統括執筆責任者

要約

IPCC 第 5 次評価統合報告書（11 月 1 日発表）は、4 月迄に発表された第 1～3 部会の報告書を短く再編集したものである。

従って、新規の知見は無い。有用な情報は多いが、その一方で、既存報告書にあった問題点を引き継いで、尖鋭化させてしまっている。

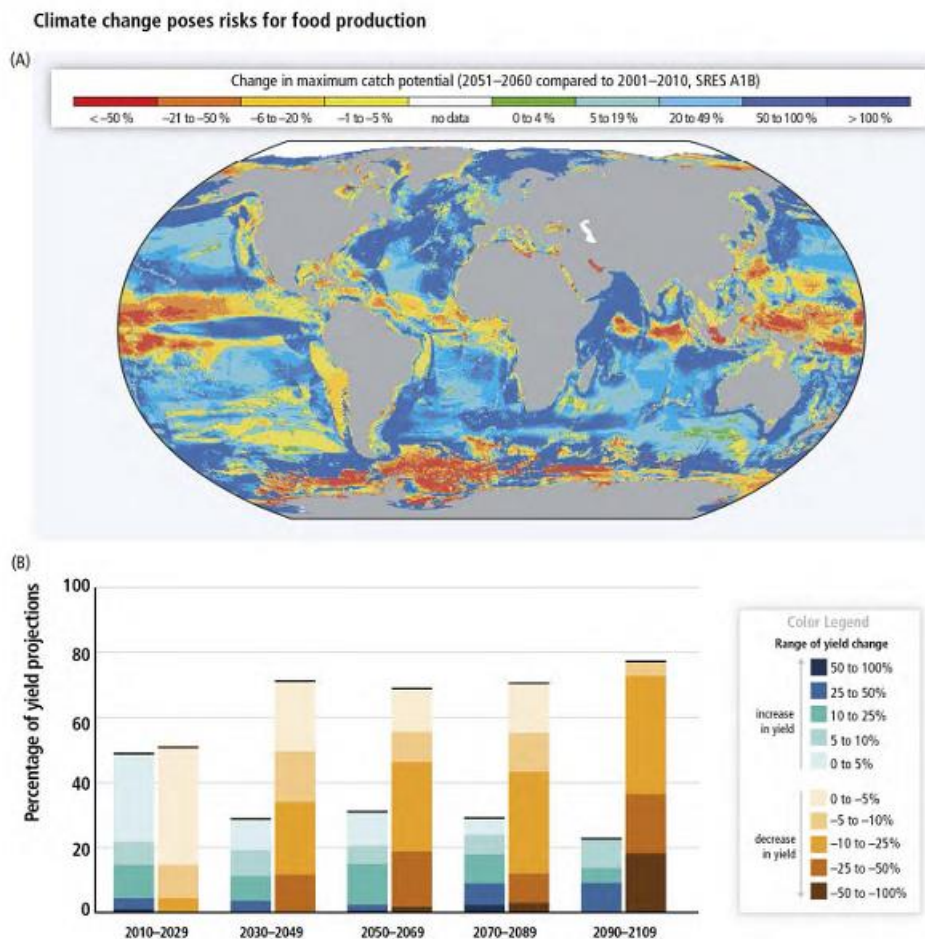
（本文）

統合報告書^{注1}の問題点について、最もよく参照される政策決定者向けへの要約（Summary for Policy Makers; SPM、以下、単に「要約」）を中心に指摘する。

1. 悪影響を誇張している

これはもともとの第 2 部会報告の問題点を、そのまま引き継いでいる。漁獲量への環境影響について、「確信度が低い」（＝科学的不確実性が大きい）と本文にはっきり書いてあるのだが、何とそのことに触れずに（！）要約に図を掲載している。穀物の収量について、将来の温度上昇シナリオをすべて混ぜあわせた上に、論文の件数を数えて、悪影響の方が好影響より大きいなどと結論している（Fig. SPM. 9）。これでは科学とは言えない^{注2}。

Figure SPM.9 [FIGURE SUBJECT TO FINAL COPYEDIT AND QUALITY CONTROL]



2. 2 度目標へ誘導している

IPCC は、本来、政策提言を禁じられている。だが統合報告書では、無数にあるシナリオのうち、2 度目標を 66%の確率で達成する「2 度シナリオ」と、今後温暖化対策をしない「なりゆきシナリオ」を対比して、「なりゆき」ではだめだから、2 度にしなければならない、と誘導している（＝はっきりとは書いてはいないが、そう思わせる書きぶりになっている）。

注1) 統合報告書

要約 http://www.ipcc.ch/pdf/assessment-report/ar5/syr/SYR_AR5_SPM.pdf

本文 http://www.ipcc.ch/pdf/assessment-report/ar5/syr/SYR_AR5_LONGERREPORT.pdf

日本語版要約概要 http://www.env.go.jp/earth/ipcc/5th/pdf/ar5_syr_outline.pdf

注2) 第 2 部会報告の環境影響評価の問題点について、詳しくはこちら

<http://wedge.ismedia.jp/articles/-/4002/>

まず、「なりゆき」については：

現行を上回る追加的な緩和努力がないと、たとえ適応があったとしても、21 世紀末までの温暖化は、深刻で広範にわたる不可逆的な世界規模の影響に至るリスクが、高いレベルから非常に高いレベルに達するだろう（高い確信度）

（要約より）

などとしている。気持ちは分からないでもない。筆者も何となく避けた方がよいとは思う。だがこの「専門家判断」について、科学的な根拠は示されていない。「なりゆき」の場合は 4 度以上の温度上昇になるが、その場合にどのような悪影響があるのか、研究が乏しいからだ。「リスクが、高いレベルから非常に高いレベルに達する」というのも意味がよく分からないが、なぜ高い確信度などと言えるのかは、もっと理解できない。

そして、このなりゆきと対置するものとして、2 度シナリオを繰り返し提示している。例えば：

工業化以前と比べた温暖化を 2℃未満に抑制する可能性が高い緩和経路は複数ある。これらの経路の場合には、CO₂ 及びその他の長寿命温室効果ガスについて、今後数十年間にわたり大幅に排出を削減し、世紀末までに排出をほぼゼロにすることを要するであろう…

（要約より）

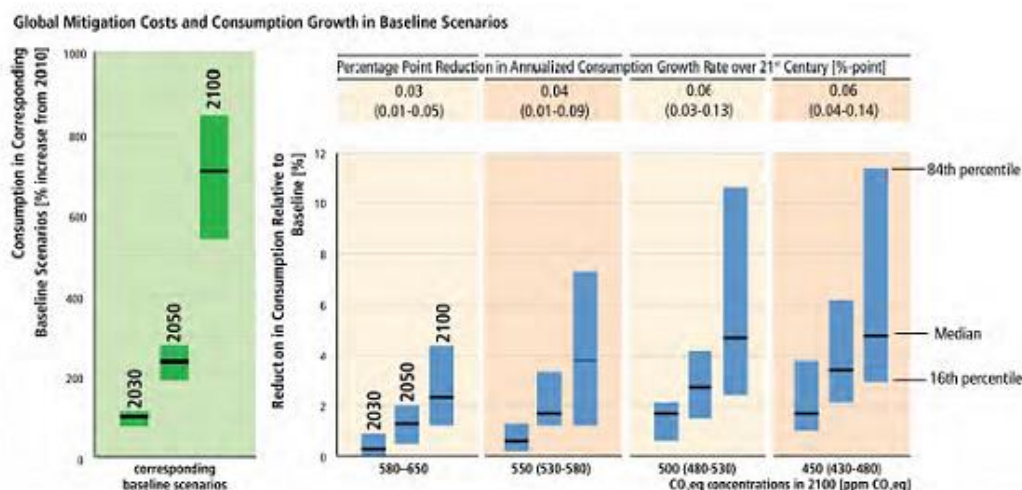
このなりゆきと 2 度は両極端で、その間こそが現実問題として知りたいところだが、それは付け足し程度にしか言及されていない。

3. 2 度シナリオの難しさを軽視している

2 度シナリオは、バイオエネルギーと CCS を世界全体に普及させて、世界の CO₂ 排出をマイナス（！）にするという、荒唐無稽なシナリオである。第 3 部会報告でも、この難しさが軽視されていたのは問題だったが、統合報告書もこれを引き継いでしまった。

2 度シナリオでも経済損失は少なく済むという趣旨の Figure SPM.13 が新たに作成されたが、これは、飛躍的な技術進歩（世界中でのバイオマスと CCS 普及）のみならず、理想的な世界政治という、ほぼありえない前提に基づくものに過ぎない。理想的な前提を少し現実に近いだけで、2 度目標は実施不可能となり、コストでいえば無限大となる。だが、この図はそういった、最も肝心なことから注意を逸らしてしまう^{注 3)}。

Figure SPM.13 [FIGURE SUBJECT TO FINAL COPYEDIT AND QUALITY CONTROL]



reserved.

4. 2度シナリオの罪

なりゆきシナリオと2度シナリオは、両極端である。現実的な落としどころとしては、いきなり2度を目指すのではなく、一定の対策を打ちつつ、技術革新を進め、長期的にリスクを管理していくということになろう。だが残念ながら、今回の統合報告書は、そのようなシナリオではなく、もっぱら2度シナリオを提示した。この実現不可能なシナリオを真に受けると、国際交渉は暗礁に乗り上げ、国内の政策論でも混乱を招くだけで、問題の解決は遠ざかる。筆者はこれを危惧している。

本当は、我々が知るべきは、もっと現実的なことだ。例えば、2度ではなく、もっとありそうな3度、4度であればどうなるか、といったことだ。だが統合報告書は、環境影響については、科学として間違うか、あるいは「専門的判断」で「リスクが増す」と繰り返し、結局、どの程度の影響なのかさっぱり分からない。環境影響については「2度、3度、4度でどの程度の影響の差があるのかは分からない」とはっきり言うべきだった。排出削減策については、シナリオは「荒唐無稽」と認めて、もっと現実的な検討をすべきだった。

注3) 第3部会報告の2度シナリオの問題点について、詳しくはこちら

<http://wedge.ismedia.jp/articles/-/3871>